朝鮮通信使の光と影

　　　　　朝日カルチャーセンター・新宿　　平成３０年５月３１日　講師　加藤　徹

ユネスコの世界記憶遺産への登録が決まった江戸時代の「朝鮮通信使」は、友好や善隣外交の文脈で語られることが多いようです。しかしその実態は「過去の戦争責任を永遠に責めたてる朝鮮側」と「友好を掲げつつ幕府の権威の誇示に利用した日本側」という図式の始まりでもありました。当時の日朝双方が残した「肉声」と挿話の数々は、ほろ苦く、また思わず笑ってしまうほど面白い。意地を張り合いながらも、江戸時代を通じて外交的破綻を回避した先人の苦心と知恵を、わかりやすく紹介します。（講師記）

１　5/31 ポスト豊臣秀吉の戦争と平和

２　6/7 朝鮮通信使からの教訓

日本側呼称　「唐入り」「朝鮮征伐」「朝鮮出兵」「文禄・慶長の役」「朝鮮侵略」

中国側呼称　「萬曆朝鮮之役」「抗倭援朝」

韓国側呼称　「壬辰倭乱」「丁酉倭乱」「丁酉再乱」「壬辰戦争」

　ポイント中立的な呼称はいまだない。日本・中国が自国の元号でこの戦争を呼ぶことがあるのに対して、韓国・朝鮮側が「壬辰」という干支を使う理由は、当時の朝鮮国は明の冊封国であったため、自国独自の元号を作れなかったため。

★『明史』巻322・外国3「日本伝」より、豊臣秀吉の条

<http://www.geocities.jp/cato1963/hideyoshi.html>

☆秀吉、信長の家来となる。

日本故有王、其下称関白者最尊、時以山城州渠信長為之。偶出猟、遇一人臥樹下。驚起衝突。執而詰之。自言「為平秀吉、薩摩州人之奴」。雄健蹺捷、有口弁。信長悅之、令牧馬、名曰「木下人」。後漸用事、為信長画策、奪並二十余州、遂為摂津鎮守大将。

日本にはもと王あり、そのしたに関白と称する者ありて最も尊し。時に山城州のかしら、信長をもってこれと為す。 たまたま猟にいで、一人の樹下にガするものにあう。驚起して衝突す。とらえてこれをなじる。みずから言う 「たいらの秀吉、薩摩州の人のやっこたり」と。ユウケンキョウショウにして口弁あり。信長、これをよろこび、馬をボクせしめ、名づけて「木下人」という。のちにようやく事を用う。信長のために画策し、二十余州をあわす。ついに摂津の鎮守大将となる。

☆秀吉、信長の権力を受け継ぐ。

有参謀阿奇支者、得罪信長。命秀吉統兵討之。俄信長為其下明智所殺、秀吉方攻滅阿奇支、聞変、与部将行長等乗勝還兵誅之。威名益振。尋廃信長参子、僭称関白、尽有其衆、時為万暦十四年。

参謀のアケチなるものあり、罪を信長に得たり。秀吉に命じて兵をすべ、これを討たしむ。にわかにして信長、そのしもの明智の殺すところとなる。秀吉、まさにアケチを攻め滅ぼす。ヘンを聞き、部将の行長らと勝ちに乗じて兵をかえしてこれをチュウす。威名ますますふるう。ついで信長の三子を廃し、関白をセンショウし、ことごとくその衆をユウす。ときにバンレキ十四年なり。

(中略)

☆秀吉が死に、日本人たちは帰国して戦争は終わった。

久之、秀吉死。諸倭揚帆尽帰、朝鮮患亦平。

これを久しくして、秀吉死す。諸倭、帆をあげてことごとく帰る。朝鮮のうれい、また平らぐ。

☆中国と朝鮮の損害は甚大で、日本に対して最後まで勝算はなかった。

　然自関白侵東国、前後七載、喪師数十万、糜餉数百万、中朝与朝鮮迄無勝算。至関白死、兵禍始休、諸倭亦皆退守島巣、東南稍有安枕之日矣。秀吉凡再伝而亡。

　しかれども、関白の東国をおかせしより、前後シチサイ、師をうしなうこと数十万、かてをついやすこと数百万、チュウチョウと朝鮮とついに勝算無し。関白の死するに至りて、ヘイカはじめてやみ、諸倭もまたみなしりぞきてトウソウを守り、東南ようやく枕をやすんずる日あり。秀吉およそ再伝してほろぶ。

☆中国の庶民は、子供が騒ぐと「黙らないと日本人が来るよ」と脅すほどだった。

　終明之世、通倭之禁甚厳。閭巷小民、至指倭相詈罵、甚以噤其小児女云。

　シュウミンのよ、倭に通ずるの禁、はなはだ厳なり。リョコウのショウミン、倭を指してあいリバするにいたり、はなはだしきはもってそのショウジジョをキンずという。

★李瀷(1681-1763)『星湖僿説』より

　李氏朝鮮(朝鮮王朝)の知識人の、豊臣秀吉に対する意外な評価。

http://www.geocities.jp/cato1963/seikosaisetu.html

壬辰倭寇、明史及我邦人皆言「平秀吉弑主自立、欲立威於国中、多行誅殺、因為射天之計」。此非也。…【中略】…是時中国人許儀後者、漂泊薩摩州、詳書倭中陰事、以報天朝。其隣居唐人、窃告之。左右皆請烹儀後。秀吉曰「彼本明人。為明告日本、事理無不可。且出人不意、実非吾心。況自古帝王尽起草昧。使大明知吾素賎、亦非害事」。置不問。反謂密告者曰「汝亦明人、敢訴明人。非凶人而何？」。以此観之、秀吉亦有許大力量、非庸人也。起自島夷、越海与大邦作仇、其勢必敗。若使生於中国恣行其胸臆、未必不成！

壬辰倭寇、明史及び我が邦人は皆言ふ「平秀吉、主を弑して自立し、威を国中に立てんと欲し、多く誅殺を行ひ、因りて射天の計を為せり」と。此れ、非なり。…【中略】 …是の時、中国人の許儀後なる者、薩摩州に漂泊し、 詳らかに倭中の陰事を書き、以て天朝に報ず。 其の隣居の唐人、窃かに之を告ぐ。左右、皆、儀後を烹んことを請ふ。 秀吉曰く「彼は本、明人なり。 明の為に日本を告するは、事の理として可ならざるは無し。 且、人の不意に出づるは、実に吾が心に非ず。 況んや古より帝王は尽く草昧より起つ。大明をして吾素より賎しきを知らしむるも、 亦た害事に非ず」と。 不問に置く。反りて密告者に謂ひて曰く「汝も亦た明人なるに、敢て明人を訴ふ。凶人に非ずして何ぞや」と。 此を以て之を観るに、秀吉亦た許大の力量有り、庸人に非ざるなり。 島夷より起ちて、海を越えて大邦と仇を作せば、其の勢ひとして必ず敗れん。 若し中国に生まれて其の胸臆を恣に行はしめば、未だ必ずしも成さずんばあらじ。

【大意】

壬辰倭寇(文禄・慶長の役)について、中国の『明史』と、わが国(李氏朝鮮)の人はみなこう述べる。「平秀吉(豊臣秀吉の唐名)は、自分の主人を殺して自立し、日本の国中を威圧するために多数の人々を誅殺し、さらに天に矢を射るような無謀な対外戦争まで仕組んだのだ」。これは間違いである。…【中略】…当時、中国人の許儀後という者が、日本の薩摩州に身を寄せていたが、日本の秘密を詳しく手紙に書いて、こっそり中国に報告した。許儀後の近所に住んでいた中国人は、許儀後のスバイ行為を当局に密告した。秀吉の側近は全員、許儀後を極刑である釜ゆでの刑にすべきだ、と秀吉に上奏した。しかし、秀吉は言った。「許儀後はもともと明国の人間だ。明国のために日本の秘密を伝えるのは、事のすじみちとして当然のことである。また、他人の油断に乗じて不意打ちをかけるのは、私の本意ではない。まして、古今東西の帝王は、昔からみな社会の底辺の出身者ばかりだ。私が賎しい素性の者だということが大明国に知られても、別に悪いことではない」。秀吉はそう言って、許儀後のスパイ行為を不問に付した。そして、許儀後を密告した中国人に向かって言った。「おまえも明国人だろう。同じ明国人をあえて密告するとは、おまえはとんでもない悪人だ」。このことから考えると、秀吉もかなりの力量をもつ、非凡な人物であったことがわかる。小さな島国の蛮族から身を起こし、海を渡って大国と戦争をすれば、負けるのも必然である。もし秀吉が、中国に生まれて自分の胸の思いを存分に行うことができていたら、ひょっとして世界征服に成功していたかもしれない。

★実務者レベルにおける漂着民相互送還体制

<http://www.geocities.jp/cato1963/singaku-32.html#02>

寛永十二年(乙亥年、西暦1635)と正保二年(乙酉年、西暦1645)、日本に漂着した朝鮮の漁民を送還した時の、両国のやりとり。

○日本国から朝鮮国への手紙

寛永十二乙亥年

日本国対馬州太守拾遺平義成、 奉書

朝鮮国礼曹大人足下、 客歳初冬、貴国民生業漁猟者四名、 漂到于本邦石州辺浦、州主為給糧服補舟楫、 遠令使价送達馬島、 茲又済其所之、 附回使之便以護還、 只在使舌、謹冀炳愿、不宣頓首

乙亥　義　成

【大意】日本国対馬州太守拾遺平義成より

朝鮮国礼曹大人さまへ

昨年の初冬、貴国の民で、漁労をなりわいとする者四名が、わが国の石見(現在の島根県西部)の海岸に漂着しました。地元の領主(原本の注：石見国には津和野藩と浜田藩があるが、どちらの藩主かは不明)は彼らを保護し、食糧と衣服を与え、壊れた舟を直し、使者をつけて達馬島まで送ってきました。この度、貴国の使節が帰国するにあたり、彼らを一緒に送還申し上げます。委細は随行の使者が口上で申し上げます。それでは。不一

乙亥　義　成　　(出典は『異国出契』)

○朝鮮国から日本国へのお礼の返信

正保二乙酉年

朝鮮国礼曹参議李徳沫、奉復

日本国臣従四位下侍従対馬州太守平公閤下、 槎使之来、順付漂民、不勝幸甚、 浜海漁氓、冒利軽出、 至於颶漂深入理難生全、 乃蒙貴国明辨疑似之迹、 厚加完恤、 登時解送、 不但小民偏被拯済之仁、 朝廷益知貴大君信義之篤、 感喜何可量也、 貴州致誠護還、 重用歎服、 承恵珍品、 更切感戢、 仍将薄物、聊表謝忱、 莞領是希、 余祝慎夏、 自玉不宣、

乙酉年六月日

　　　　礼曹参議李徳飛

【大意】朝鮮国礼曹参議李徳沫より

日本国臣従四位下侍従対馬州太守平公閣下へ　ご返信

漂着民を使節とともにご送還くださり、幸甚の至りです。海辺の漁民たちは、利益を求めて軽々しく遠洋までこぎ出し、嵐にあって遠くまで流され、本当なら生きて帰れぬところでした。幸い、彼らは貴国のご厚意により、公明な取り調べだけで済み、手厚い保護を受け、即座に護送つきの帰国を許されました。わが国の末端の民が貴国の救済の仁を受けたのみならず、わが朝廷もまた貴国の大君(江戸幕府の将軍)の信義の篤さをますます認識した次第です。感謝の喜びの念は、とても言葉では表せません。貴州(対馬藩)が誠心誠意、わが漂着民を護送してくださったことに、感服いたします。そのうえ、結構な贈り物まで頂戴し、感激のきわみです。当方からも感謝のしるしに、つまらぬ物で恐縮ですが、お返しの品をお送りしますので、ご笑納くだされば幸いです。それでは、残暑が厳しいので、どうぞご自愛下さいますよう。不一

乙酉年六月○日

　　　　礼曹参議李徳沫

★第一回朝鮮通信使と「朝鮮国礼曹俘虜刷還諭告文」(佐賀県立名護屋城博物館・蔵)

http://www.geocities.jp/cato1963/singaku-32.html#05

　朝鮮国礼曹、為通諭事

　国家不幸、猝被兵禍、八路生霊、陥於塗炭。其僅免鋒刃者、又皆係累迄今二十余年矣。其中、豈無思恋父母之邦、以為首丘之計。

　而未見有襁負道路而来者。此必陥没既久、無計自出。其情亦可憐也。

　国家於刷還人口、特施寛典。丁未年間、使臣率来被虜人口、並令免罪。至於有役者免役、公私賤則免賤、完復護恤、使之安挿本土、其所刷還之人、亦皆得見親党面目、復為楽土之氓。在日本者、亦必聞而知之矣。

　況今日本既已殲滅我国讐賊、尽改前代之所為、致書求款。

　国家特以生霊之故、差遣使价。被擄在日本者、生還本土、此其時也。若一斉出来、則当依往年。出来人、例免賤免役、完復等典、一一施行。諭文所到劃、即相伝依諭文通告、使价之回、一時出来。庶無疑畏遷延、免作異域之鬼。事照験施行、須至帖者。右帖下被擄士民、准此。

　朝鮮国礼曹、通諭の事の為にす。

　国家不幸にして、猝かに兵禍を被り、八路の生霊、塗炭に陥つ。其の僅かに鋒刃を免るる者も、又皆係累して今に迄るまで二十余年なり。其の中、豈に、父母の邦を思恋し以て首丘の計を為すこと無からんや。而も未だ道路に襁負して来たる者有るを見ず。此れ必ずや、陥没すること既に久しく、計として自ら出づる無きならん。其の情、亦た憐れむべきなり。

　国家の人口を刷還するに於けるや、特に寛典を施す。丁未年間、使臣、被虜人口を率ゐ来り、並びに罪を免かれしむ。役有る者は役を免じ、公私の賤は則ち賤を免じ、護恤を完復し、之をして本土に安挿せしむるに至る。其の刷還する所の人、亦た皆、親党の面目を見、復た楽土の氓と為るを得。日本に在る者も亦た必ずや聞きて之を知るならん。

　況んや今、日本は既已に我が国讐賊を殲滅し、尽く前代の為す所を改め、書を致し款を求む。

　国家、特に生霊の故を以て、使价を差遣す。擄されて日本に在る者、本土に生還するは此れ其の時なり。若し一斉に出で来れば、則ち当に往年に依るべし。出で来る人は、例として賤を免じ役を免じ、完復等の典、一一施行せん。諭文の到劃する所、即ち相ひ伝へ、諭文の通告に依りて、使价の回るに一時に出で来れ。庶はくは疑ひ畏れて遷延すること無く、異域の鬼と作ることを免かれよ。事は験に照らして施行し、須らく帖に至れ。右帖下の被擄の士民、此を准す。